釋迢空短歌私抄 II

著者略歴

明治42年5月4日生。
岡山一中，国学院大学高師部卒。
旧制の中等教員，海軍教授を経て，
戦後，岡山県箭田高等学校長，岡山県立岡山盲学校長。
現在，社会福祉法人盲児施設岡星寮長．岡山商科大学専任講師。
昭和2年8月，「蒼穹」に入社，45年12月まで同人。
昭和7年1月「短歌詩人」の創刊に与り．21年2月「龍」と改めて主宰。
歌集「童貞抄」「朱夏」「地上の塔」「足音」四人歌集「候鳥」「紅岩」「丹塗り舟」「林間徒歩」「遠野の雲」。
昭和30年度岡山県文化賞受賞。
現住所　701-31　岡山市沢田818

釋迢空短歌私抄　Ⅱ　　©1973

昭和48年9月15日　発行　　定価 1,500円

著　者　　服部忠志
発行者　　天久卓夫
印刷者　　田中　忠
発行所　　潮汐社
東京都港区西新橋3-6-10 法令印刷ビル
電話03—433—8746 振替東京55746

大日本法令印刷株式会社印刷製本

3392—0071—4691

釋迢空短歌私抄　II

春のことぶれ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

羽澤の家……5
人ごと……49
東京詠物集……81
門中瑣事……95
山かげ……119
風の音……137
氣多はふりの家……159
大阪詠物集……177
雪まつり……189
昭和職人歌……209
春のことぶれ……225

羽澤の家

羽澤の家

『春のことぶれ』は、大正十四年・十五年・昭和二年・三年・四年の五ケ年にわたる作品から成る。歌集の前に、

我がまをす
春のことぶれ　聴きたまへ

けふのあしたより後、
この国の文学
いよゝ盛りにおこり、
この国の歌
いよゝ弘くゆきとほらむ。

さるにても、
わが歌のいぶせさ。
かくしつゝ
いとゞさびしく　かそかに

ます〳〵に、思ひえがたくなり行きて、
つひに
花匂ふこの国の
文運に、あづかることもあらじ、とぞ思ふ。
昭和五年春王正月　　釋　迢空

とあり、集の最後に、

春のことぶれ

歳深き山の
かそけさ。
人をりて、まれにもの言ふ
声きこえつゝ

からはじまる八首をとどめている。「ことぶれ」は「事触れ」であり、「言ぶれ」であるはずで、諸国巡遊のほかひびとが、家家をめぐつて年頭のよごとをのべ、さいさきのよい春の予言をして廻つたのを言ふのである。迢空は自作の歌集の序のかはりに、この国の文運を祝福し、挨拶として卑下の姿勢をしてみせた。この道化めいた自虐のなかに自信のほどをほのめかすところがあるとも見得る。

この集では短歌が行分けになつてゐる。啄木の短歌の行分けは土岐哀果（善麿）のローマ字歌集などの影響によることだが、四行乃至三行の、しかも段落をつけての表記法は念の入つたもので、発想の気息をあきらかにして読むのに便利である。併し、印刷の上でスペースをとる点もあつてのことか、この集以後、同じ表記はとられなかつた。

大正十四年五月に出た改造社の自選歌集は六冊で、斎藤茂吉・島木赤彦・古泉千樫・中村憲吉・木下利玄、それにこの著者のもので、著者には先行歌集がなかつたから、自選とはいつても実は処女歌集であつた。

「自歌自註」の中に「日光における先輩達も、幾分私の歌の変つた暗さを、買ひかぶつてゐてくれた傾きがある。さういへば、供養塔以来の私の歌は、私自身をひきたてたばかりでなく、何となく変つたものとして、同人達も注目したやうである。併し、これは誰にも言つて来たことだが、私が常に、供養塔や木地屋の歌のやうなものばかり作つて来た訳ではない。もつと楽しい、人の世の愛情なんかも、とり扱つて歌にした。それからも一つ、私がこの年まで、産を治めることが出来ず、家をなすに到らない生活であるのに興味をもつた人は、私の歌を、すべてさういふ方面から解釈しようとする。併しこれも一往尤で、さうした論理にかなつた歌は、いくらもひき出すことが出来る。けれども、さういふものばかり見てくれて、片方に明るく楽しい人生をうたつてゐるものが、閑却せられてゐるこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

との多いのは、作者としては悲しいことである。上手・下手といふ評価は、人々の自由にまかせるほかはないが、作物にない私を抽出したり、又、作物にある私を没却したりすることは、たとへそれが好意から出てをつても贔屓の引き倒しになるおそれがある」と言つて自分の立場を釈明するところがある。白秋の「黒衣の旅びと」と見る迢空観も、一方的な見方といふことになる。正当な評価を誤る先入観を避けてゆきたいものである。『日光』への加盟は、千樫に誘はれてのことだが、『アララギ』脱退は千樫と直接に関係のないことであつた。原阿佐緒と石原純が仙台で恋愛問題をおこす。阿佐緒が純に歌を見て貰つてゐたのだが、それが仙台の北方七ツ森の方から緋裏のマントをひるがへしながら乗馬で純のもとに通ふといふことになり、純は東北大学の教授の地位を去ることになる。島木赤彦は『アララギ』の編輯後記で牝狐の語をもつて彼女を罵倒するといふことにさへなつて、純は『アララギ』をも去るのであるが、世評では千樫がその両方と親しかつたために、結果としてはふたりの関係をとりもつたことになり、これまた『アララギ』を去るきつかけとなつた。『日光』は、期せずしてこの純・千樫・迢空の三人の『アララギ』関係者を迎へることになるのである。

*

大正十一年の「年譜」に、「十二月鈴木金太郎と共に、下谷区谷中清水町十二番地に転居。」とあり、大正十二年、「十二月、豊多摩郡渋谷町下渋谷羽沢に移る。」とあり、更に翌大正十三年に、「六月、渋谷町羽沢一八九番地（後、東京市渋谷区羽沢町）久邇宮邸筋向ひの家に移る。」とあり、昭和三年、

「十月四日、長兄静死去。十日、東京府荏原郡大井町出石五〇五二番地（後、東京市品川区大井出石町）に転居。」とある。さうした家居を背景とすることも知つた方がよい。

冬立つ厨

くりやべの夜ふけ
あか〳〵　火をつけて、
鳥を煮　魚を焼き、
ひとり　楽しき

この歌は、女手のない生活の中で自炊の楽しさを表現してゐるわけだ。このへんにも迢空の性格の偏向を感じられても仕方のない特異さがある。渋谷の家で、たまたま手伝ひに来てゐた大阪の姉が病気になり、下女が近所にゐた学生と通じて子を生むといふやうなことがあつて、同居の鈴木金太郎の遅い帰りを待ちながらのことである。「あか〳〵火をつけて」は、もちろん電燈をつけてであつて、炊事用の火などではない。「鳥を煮　魚を焼き、」に心のはずんだ調子があり、それが「夜ふけ」であることのただならぬ情景を思ひ浮べさせられる。

はしためにに、昼はあづくる

くりやべに
　鍋ことめける
　この夜ふけかも

「くりやべ」の表現のあいまいさは、迢空も反省するところである。昼のまは、女中がゐるとしても女中にあづけて省るところのない厨に鍋がことことといつてるこの夜ふけよ、の意だが、鍋の中でものが煮たつてことことといふのである。鍋の類が複数に、鍋をかけたりはづしたり、あちこちするのに音がたつ、といふふうにも感ぜられる。

米とげば、手ひら荒るれ。
　今はもよ
この手を撫でゝ
　誰かなげかむ

夜中厨房でものを煮たり、焼いたりしてゐる。そこからの発展した空想語と解してよいのであつて、その空想の中で、かつての恋びとのことを思つてゐるといふかたちになつてゐる。それに近い想像力

が加はつてゐると言つてよい。『万葉集』の民謡の一つ「稲つけば皸(かか)る吾が手を今宵もか殿の若子(わくご)が執りて歎かむ」に近い発想がこの歌にあることは誰しも気づくことであつて、それはそれでよいのだが、同じ発想が男女の性を逆にしたかたちであらはれると、異様な雰囲気を醸すことになる。米を磨いで炊事をするもんだから手のひらが荒れる、ままよ荒れてもよいわ、今となつては、恋を失つた今はさ、この荒れた手を撫でて誰がなげかう、歎くものなぞゐない、といふことになり、歌のうへに出て来る恋ひびとのおもかげは、とし上の女か何かのやうな一種倒錯の感じを受ける。

年かへる春のあしたは、
四十(ヨソヂ)びとぞ
　と　思へど、
我は、たのしまざらめや

かへる年、は次の年、翌年、の意で「年かへる春のあした」は新年の朝、新春早朝、つまり元旦といふことにならう。一年の周期性を頭に入れての言ひ方になる。次の「思へど」は思ふが、思ふけれどもであつて反対を述べようとする心がある。四十といふとしは初老で、芭蕉などはすでに翁(おきな)とさへ呼ばれた年齢ゆゑ、世の常のたのしみからは遠いはずだが、「我はたのしまざらめや」となる。我は、

には選択の意があつて、ひとはひと、我は我のこころだ。たのしみもこの場合は飲食の楽しみで、深夜にみづから給する飲食の楽しみであつて、ぼくなどをも含める世の常びとの色慾の楽しみなどでないところに作者の個性があり、ただならぬあやしい気分の伴ふのを覚える。

人の世の嫁が　とりみる寒き飯
底(ソコ)れる汁に
　飽かむ　我かは

食への贅沢が希求せられてゐる。世間の嫁が食膳にのぼすやうな冷えた飯や、鍋の底にのこつた汁などで満足する自分であらうか、いや満足せぬ、といふのだ。家族制度の中での嫁の地位の低さが意識にあつてのことで、さういふ発想と、それによつて修飾せられる「寒き飯」、「底れる汁」が社会的なひろがりと、そこに記憶を発する哀感を湛へるといふことになるやうである。底れる、は底といふ名詞をラ行四段に働かせ、已然形「底れ」に助動詞「リ」がついたと考へてよく、底の方にある状態にある、といふことになる。料理といふ名詞を働かせて料理(りやう)るといふのと同じ理屈である。

物見れば、

見る物ごとに、喰はむと思ふ。
　むべ　わが幸(サチ)も
　喰ふに替へつる

食ふことにのみすべてをかけて、世の常の幸福をも願はぬといふ誇張したもの言ひのなかに作者の文芸観の一面が見えるやうな気がする『古代研究』民俗学篇2に「ごろつきの話」といふのがあるが、「時代々々の道徳の力は、あらゆるものを変化せしめずには置かない。同時に、時代々々の文芸、芸術は、此と交渉なしには生れない。現代の道徳は立派であると言へよう。だが今では、多少それが固定したと思はれる。随つて、感激性を失つた、現代の文芸、芸術が、此を重視しなくなつたのには、さうした理由があつたのだと思はれる。」と言つてゐる。迢空の歌舞伎発生の説明にも、「いざやかぶかん、いざやかぶかん」といひいひごろつきの身振り大仰に踊るところから歌舞伎の名が出たとする。「かぶく」といふのは狼藉を働く意だといふ。反道徳的な不良性が日本の芸能を育て、文芸を豊かにしたといふ立場からすれば、この作歌の意図も明らかになるだらう。

　前(サキ)の世の　我が名は、
人に　な言ひそよ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com